

## 1 はじめに

初任以来、地域や学力層の異なる高等学校での勤務を経験してきたが、どの学校の生徒にも共通して感じる課題がある。それは音楽の基礎的な知識・技能の修得である。学校行事や部活動で見事に演奏する生徒が、読譜や記譜に不慣れであることは珍しくない。生徒の耳の良さや音楽を吸収する力には感心するが、感性だけで演奏するのには限界がある。基本に立ち返り、疎かになっている部分を生徒が補完できるよう、楽典等のよりよい指導法を模索してきた。

平成18年9月、夏休みの俳句が廊下に展示されていた。瑞々しく、個性にあふれた短冊を読んでいくうちに、ふとひらめいたのが、生徒自身の言葉による歌づくりだった。歌づくりなど創作の学習には楽典の知識が必要となるので、この学習をきっかけに、楽譜や楽典について興味・関心をもつことにつながるのではないかと考えた。

本研究は楽典をベースに言語と音楽、創作と演奏、個人作業とグループ活動、と多面的な要素をもつ学習活動である。毎年、改訂を続けているが、平成25年度までの実践を報告する。

## 2 研究内容

修学旅行の思い出をテーマに作詞し、8小節程度の歌を作曲する→個人の作品を持ちより、それぞれのグループごとに一連のパフォーマンスにまとめる→クラス全体の前でアンサンブル発表をする→推敲を経た清書を提出して、完了する。

## 3 事前学習

1年次に音部記号、音名、音価、音程、音階、調性、コードネーム、2年次前期にキーボード伴奏づくりと弾き語りを学ぶ。後期はじめに創作の導入を行った。(学習指導案参照)

## 4 方法と経過

授業形態は、全体一斉指導と個別添削指導。4人組で着席。机は向き合わせ、各班に1台キーボードを用意した。個人の作品ではあるが、意見を交換をしながら進められるようにした。

### (1) 作詞

自由につくる。七五調でも、自由詩でも可。8小節を想定した長さにする。

♪手順のヒント ※A3程度(大きめ)の紙と色鉛筆、カラーペン等を用意した。

- ① 思い浮かんだ言葉や絵を次々かき、自由に連想してゆく。
- ② ①から好きな言葉や印象のある言葉などを選び、さらに連想を続ける。
- ③ 言葉を関連づけたり、並べたり、言い換えたりしながら、言葉を選ぶ。
- ④ 歌詞としてまとめ、清書する。

マインドマップの手法を参考にした。イメージをより豊かにふくらませるねらいから、色や絵も用いた。作詞の方法は自由だが、手順を示す方が導入しやすかった。生徒は思い出話に花を咲かせながら、楽しげにつくっていた。彼らの美意識もうかがえて興味深い。

### (2) 歌詞の音読と分析

- ① 歌詞を、まとまりごとに、ひらがなでペン書きする。文字数を脇に記入する。
- ② なるべく大きな声で、ゆっくりと音読する。
  - a 言葉の抑揚を矢印  を用いて、鉛筆で書き入れる。★指導例1
  - b 言葉の特徴(長短、強弱、韻等)を確認する。
  - c 言葉の意味や役割を確認し、キーワードを選ぶ。

抑揚がわかりにくい場合、高低を逆さにして読めば判断できた。語感、意味、役割（品詞）、キーワードを意識し、どのように表現したらよいかを考えるとところから、作曲は始まった。

★指導例1 「イントネーションを調べよう」 「落葉松」（野上 彰 作詞）より 文字数

からまつの あきのあめに わたしのてがぬれる 五 六 九

(3) 設定

- 8小節を基本とする。歌詞の割り振り、テンポ、拍子、調性、コード進行を設定する。
- ① イメージにあったテンポを決める（速い、中くらい、遅い）。
  - ② 音読しながら、拍子を決める（2拍子、3拍子、4拍子、6拍子、等）。
  - ③ 歌詞をおおまかに割り振る。
  - ④ イメージにあった調性を決める。ハ長調またはイ短調で歌をつくってから、移調してもよい。
  - ⑤ コード進行をつくる。1小節にコード1種類、全終止を基本とする。★指導例2・3

音読をくり返すうちに、テンポが落ち着き、拍子やリズムが生まれて、8小節に歌詞が収まっていくというのが概ねの状況だった。うまくいかない場合は保留して先に進ませた。つくる過程でアイデアが広がり、要素が変化することによって問題は解決するものなので、このことに限らず、困った時点で留まらないようにさせた。

⑤は機能と声をもとに、自分のイメージにあったコードを選びながら、進行をつくった。和声音楽は調性感を生み、まとまりが感じられること等を説明した。また、好きな曲で用いられているコード進行を分析し、自作に模倣することも認めた。同じ進行から異なる音楽を生成することで、有意義な発見があるからである。

生徒の中には「つくりたい」という気持ちが先行して、感覚的に好きなコードを並べて、自己流に進行をつくる生徒もいた。意欲を尊重して自由にさせたが、行き詰まってしまうこともあり、うまくいかない理由を考えさせたところ、理論の意義を感じたようであった。

★指導例2 「TDSをふまえて、コード進行を考えよう」

♪和音の機能から導かれる進行（Tonic, Dominant, Subdominant）

T → all OK, D → T, S → S →, S → D → T, S → T

これをハ長調に置き換えると、次のようになる。

コードネーム	C	Dm	Em	F	G	Am	Bdim
和音記号	I	II	III	IV	V	VI	VII
和音機能	T	S	TorD	S	D	T	D

C (I), Am (VI) はオールマイティ。どの和音にも進めるが C > Am。C はいわば王様だ。  
 G (V) → C (I) or Am (VI)。G は安定したい。【全終止 or 偽終止】  
 G のままでは終われない、続く感じがする。【半終止】  
 F (IV) → Dm (II) はよくあるが、逆はあまりみられない。ドミナント進行にならう。  
 Dm (II) → G (V) 通称「トゥーファイブ」。終止形（カデンツ）によくみられる進行である。  
 F (IV) → C (I) 【変終止】通称「アーメン終止」。賛美歌などによく用いられる。

Em (III) は場合によって、Tonic にも Dominant にもなる。∵構成音が両方に共通する。  
Bm (VII) は G7 (V 7) として用いられるのが通例である。

★指導例 3 「ハ長調のコード進行の例」 ※ 8 小節。1 小節にコード 1 種類。全終止の場合。

小節数 機能	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	備考
	T T	TorS D ↑注 V	TorS T	D	T	TorS	D	T	← Tonic, Subdominant, Dominant  注V 2 小節目が D なら 3 小節目は T
選択肢	C	C Am F Dm ↑注 ii Em ↑注 iv G	C Am F Dm Em	G	C Am	C Am F Dm D ↑注 iii Em ↑注 iv	G	C (ド) ↑注 i	注 i 主音で終わると安定する。 注 ii Dm → F はあまりみられない。 (ドミナント進行にならって考えるとよい) 注 iii D は G の Dominant であり、 C のド♭がドミナントにあたる。 (ある和音からみて 5 度上の和音はドミナントとして、その直前におくことが可能) 注 iv Em は状況により TD のどちらとしても使える。

※ヒット曲によく見られるコード進行： C → G → Am → Em → F → (C → F) → G → C

上記は指導者がピアノを弾き、和音の響きや違いを聴かせながら、解説した。可能な限り、生徒に弾かせて、自分の耳と手で確認をさせた。三和音を基本に説明したが、七の和音もこれにならう。テンションコードの使用や 1 小節に複数のコードを配置することも認めた。

#### (4) 作曲

歌詞のイメージに合わせて、歌いやすく、言葉が伝わりやすい旋律をつくる。

- ① リズムを考える。言葉のリズムを生かしながら、拍の流れに歌詞をのせる。★指導例 4
- ② 音程を考える。言葉のイントネーションを生かして、音を選ぶ。★指導例 5
  - a 和声音のみで、旋律のラインを描く。→跳躍進行
  - b 非和声音（経過音、刺繍音等）を入れて、バランスよく整える。→順次進行

配慮すべき要素として声域、ブレス、フレーズの長さ等が挙げられる。また、キーワードの扱い方や曲の展開についても考えさせた。なお、①②と手順を分けたのは、段階を踏めば誰にでも手際よく旋律をつくることができるからである。非和声音の用法を理解して、上記を同時進行で考える生徒もいた。また、音読を重ねるうちに頭の中に旋律が鳴るという、理想的な生徒もいた。それが理に合っている場合は自然で美しい旋律となったが、そうでない場合は旋律としてまとまらなかったり、音楽的にぎこちないものとなった。ここでは、感性と知性のどちらも駆使する必要がある。

#### ★指導例 4 「拍の流れに歌詞をのせよう」～リズム

はじめは四分音符など基本になる音符に言葉をのせ、拍子と文字数に応じて、音符を細分化したり、それらをタイで結んだり…と置き換えてゆくと、リズムは容易に変化する。文字数の少ない箇所には休符や長い音符を用いるとよい。アウフタクトも効果的である。

例「からまつの」（五文字）を 4 分の 4 拍子、1 小節におさめる。

の ← 「の」が余るのでどうするか？

変形 a 前半の 4 分音符を半分分割り、余った 2 拍を伸ばす。

b 4 4 から - まつ の

変形 b 変形 a の 8 分音符の内側 2 つをタイ。  
シンコペーション ( ) に置換。

c 4 4 か - ら まつ の

変形 c 変形 a の 8 分音符の冒頭 3 つをタイ。  
付点のリズム ( ) に置換。

その他、音の長さの組み合わせ方は無数にある。イメージにふさわしいリズムを見つけよう。  
なお、原曲は、7/4拍外や三連符を使用している。

4 4 から まつ の - (あきの)

### ★指導例 5 「音を選ぼう」～音程

① 和声音のみで、旋律のラインを描く (イントネーション、リズム、キーワードを考慮)

※音符・休符を書く前の準備として、五線には音部記号→調号→拍子記号→小節線→終止線 (複縦線) を書く。  
コードネームを五線の上方に、歌詞は五線の下方に書く。

例 C F6

② 非和声音を加えて、バランスよく整える (経過音: ×ケ, 刺繍音: ×シ 等を明示すること)

例 C xケ xシ F6 xシ

歌いやすく、言葉が伝わりやすい旋律にするには何をしたらよいか。工夫しよう。

### (5) 編曲 ※選択

歌の旋律をつくり終えたら、弾き語りの伴奏や対旋律などをつくり、アレンジを試みる。

### (6) 楽譜の作成

できあがった歌の旋律 (編曲も含む) を初稿としてまとめる。グループへの配付用に、  
ヴォーカル譜 (歌の旋律とコードネームを記したものを) を 3 部作成する。

ここまでは全体説明と個別添削を織り交ぜて指導した。編曲で時間調整したが、進度に差  
が出た。次項からは一斉に活動するため、遅れている生徒には補習を行い、進度を揃えた。

### (7) グループ活動 (4 人組)

- ① ヴォーカル譜を交換する。
- ② 譜読みをする。
- ③ 企画する (曲順、開始・曲間・終了の方法、伴奏の有無、歌い方、並び、動き等)。
- ④ 練習する。よりよい仕上がりを目指して、改訂を加える。
- ⑤ エントリーシートを提出する。※各グループ 1 枚



写真1：グループ活動より

譜読みは案外、時間がかかった。原因は記譜にあった。わかりやすく書く必要を生徒は感じたようだ。4曲を一連のパフォーマンスにまとめるためにアイデアを出し合い、練習時にも活発な意見交換や改訂がなされた。オリジナル曲の自由さからか、生徒の様子がいつもよりのびやかに感じられた。

## (8) 発表会

- ① 準備する。(グループの演奏順決め、係分担、会場設営、諸注意)
- ② 本番で、演奏(アンサンブル)と鑑賞を行う。
- ③ 講評用紙を記入して、交換する。
- ④ アンケートと投票用紙を記入し、提出する。

大半の生徒はしっかりと演奏することができたが、照れや恥ずかしさを隠せない者もいた。他グループへの関心が非常に高く、期待や共感をもって聴き合っていた。どのクラスも明るく、和やかな雰囲気で行進した。講評用紙の交換は級友の反応がすぐにわかり好評だった。アンケートは学習をふりかえりながら、生徒自身が成長を感じ、指導者も成果を知ることができた。投票は余興だが、発表会の締めくくりを盛り上げるのに有効であった。投票結果の発表と音楽科講評は次回、行った。

## (9) 推敲・清書提出

発表会を終えて、再度、作品を練り直して完成させる。清書を提出する。

推敲については実際のところ、グループ練習での改訂を書き改める程度であった。

清書の前後に、記譜に関するチェック項目を示し、確認をさせた。一回で完璧に書ける生徒もいれば、再提出を繰り返す生徒もいる。これは音楽というよりも注意力に因るものと考えられる。発表がよくできたからといって、誤用に目をつぶる訳にはいかない。最後が肝心である。もっとも、再提出を繰り返す生徒ほど、完成時は達成感を味わったようである。

### ♪記譜に関するチェック項目

- |                                  |                                     |  |
|----------------------------------|-------------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> 曲名      | <input type="checkbox"/> 作詞・作曲者名    | <input type="checkbox"/> (あれば) テンポ表示、発想標語、強弱記号 |
| <input type="checkbox"/> 音部記号    | * 毎段の冒頭に、音部記号を正しい位置に書く。             |  |
| <input type="checkbox"/> 調号      | * 毎段必要。音部記号のすぐ右側に書く。ハ長調とイ短調には不要。    |  |
| <input type="checkbox"/> 拍子記号    | * 途中で拍子が変わる場合を除き、冒頭のみを書く。           |  |
| <input type="checkbox"/> 小節線     | * なるべく、各段の終わりが小節の途中にならないようにする。      |  |
| <input type="checkbox"/> 終止線     | * 曲の終わりに書く。                         |  |
| <input type="checkbox"/> コードネーム  | * 五線の上方、各小節の冒頭等。                    |  |
| <input type="checkbox"/> 音符の棒の向き | * 第3線を境目に上下する。対旋律がある場合はその限りではない。    |  |
| <input type="checkbox"/> 変化記号の位置 | * たまの左側、その高さに。                      |  |
| <input type="checkbox"/> 付点の位置   | * たまの右側。たまが間にあるのか、線にあるのかによって場所が変わる。 |  |
| <input type="checkbox"/> 歌詞      | * 五線の下方。音符にあてはめる。伸ばす音には(一)をつける。     |  |

## (10) まとめ

作品を評価して返却。前任校では佳作を掲示したり、修学旅行文集にも掲載された。

## (11) その他

並行して、〈名曲に学ぶ〉を実施した。歌唱や鑑賞を通じて、それぞれの作品の特徴や魅力を感じ取り、創作のヒントを得る機会を設けた。(学習指導案参照)



写真2・3 平成24年度発表会より

## 5 生徒の感想(平成24年度)と考察

### (1) 授業を受ける前の印象

興味有。(経験があるので) 楽しみ・苦にならない。楽しみだが発表は恥ずかしい。  
難しそう。無理。できる気がしない。不安。めんどくさい。大変そう。緊張する。恥ずかしい。  
やりたくない。修学旅行の課題が一つ増えた。私は滝廉太郎ではないんだよね。

できるだけ正直に書いてもらった。好奇心旺盛で、臆することのない本校の生徒達なのだが、positive 派が4名/68名と少数だったのは意外であった。negative 派64名のうち多くの生徒が、創作学習に馴染みがないことによる不安や、作曲に対する敷居の高さを感じていたようである。

### (2) 実際に創作・発表してみた感想

positive 派：やっぱり楽しかった。作曲は奥が深い。自由にできると思っていた。  
作曲は簡単でも名曲をつくるのは大変。

negative → positive 派：

大変(8小節にまとめるのが、ルールを守るのが)。

意外に(楽しい、簡単、手順を追えばできる、できあがる経過が嬉しい)。

面白い(伴奏付けが、演奏したら、学べて、簡単、曲らしくなって、個性的で)。

嬉しい(自分の好みにできた、自分だけの曲ができて、友達と協力・シェアできて)。

感動(みんなが歌ってくれて、自分にもできて)。

新鮮。アイデアが広がった。楽典を学べた。作曲家はすごい。良い経験ができた。

友達の曲が楽しい(歌えて、聞けて、いろいろで)。もっと知識をつけたいといけない。

難しい(ルールを守るのが、思い通りにならなくて、作詞・伴奏づくりが、弾き語り)。

negative 派：発表は恥ずかしかった。あまり意味ない。

### (3) 今後、やってみようと思うこと

作曲したい(長い曲を、変化のある曲を、他の楽器の曲を)。自作自演したい。編曲したい。

作詞したい。言葉のセンスを磨こうと思った。

作曲者に対して(意図をくみとりたい、存在を意識したい)。

部活で活かしたい(コードを考えるようにする、歌詞と旋律の関連を考えて歌う)。

これからも聞く側でよい。

授業を受ける前に多数を占めた negative 派が授業後には一転し、前向きな意見を述べ、この学習に対して肯定的になった。negative 派2名にとっては好ましい学習ではなかったようだが、作品自体はよくできていた。positive 派は一貫して肯定的であった。

## 6 考察

創作は、生徒自身が主体的に発信しなければ始まらない。演奏や鑑賞とは異なる角度からの音楽への取り組みは新鮮で、生徒の心は動いた。生みの苦しみと喜びを味わい、言語と音楽によるコミュニケーションを楽しむうちに、楽典に対する捉え方も変化したようである。基礎・基本を大切に学ぼうとする気持ちが芽生え、生徒の成長が見られたことが収穫である。

創作指導では、どんな生徒に対しても誉めるところが多々ある。技能には経験の差が表れるが、発想に上下も不正解もない。自分の思いを他者に伝える努力が表現力を養う。つくり手になることで他者の作品にも興味・関心をもち、演奏者としての視野も広がるに違いない。

授業では、生徒が互いに切磋琢磨しながら、自他の能力を伸ばすことがのぞましい。同じ教材に学習段階の幅をもたせて選択させることで、自分らしく、共に学べる土壌をつくった。また、生徒の実態に合わせて、目標や方法をアレンジしやすいことも、創作学習の利点である。

今後は、作品の質の向上をめざしたい。楽典学習の延長ゆえ、平易な歌づくりとなったが、これからは作曲指導としてのアプローチも考えて、発展させていきたい。

### 芸術科（音楽Ⅱ）学習指導案

千葉県立〇〇高等学校

教諭 〇〇 〇〇

- 1 日時・場所 平成24年11月28日（水）第6～7限 音楽室
- 2 学級 2年ABC組音楽選択者（男子10名，女子14名，計24名）
- 3 学級観

明朗闊達で、意欲的な生徒集団である。音楽経験の個人差は大きいですが、好奇心旺盛で、何事にも諦めずに挑戦する生徒が多い。向上心の高さが彼らの成長を支え、能力を伸ばしている。

- 4 題材名 コードネームを活用した創作と発表「関西修学旅行の思い出を歌う」

#### 5 題材設定の理由

楽典は表現、鑑賞のいずれの活動においても、音楽を根底で支える土台であり、生涯を通じて音楽を愛好するためにも、できるだけ早期に身につけておきたい知識である。

新学習指導要領（平成21年3月告示）では、音楽を形づくる要素を知覚し、それらの働きを感受しながら学習活動を展開することが求められている。感受した要素を音楽的に理解したり、表現したりするためには、感性と知性の双方を高めることが必要になると思う。

知的な分野として、楽典指導をソルフェージュや表現教材に関連させて行ってきた。コードネームは実用性が高く、弾き語り伴奏づくりやアンサンブルという形で授業を展開してきた。そして、この題材を楽典学習のまとめとして位置づけた。

創作の方法にはさまざまあるが、生徒が意図を具体的に表現したり、理解し合うためには、オーソドックスな和声音楽が向いているのではないかと思う。コンピュータにも頼らず、自らの手で五線譜に書き記しながら、楽典の知識を用いて創作することをあえて選んだ。

修学旅行をテーマにしたのは高校時代の一大イベントであり、旅先には題材が豊富にあるからだ。共通の話題ならば生徒同士の共感も得やすい。記憶を音楽として蘇らせ、分かち合うことは素敵な事後学習ともいえる。言葉と音楽の融合を味わい、作品を表現・鑑賞し合う体験を通じて、生徒に創作の喜びを感じ、言葉と音楽によるコミュニケーションを体験してほしい。

## 6 題材の目標

- (1) 自らの思いを言葉や音楽で表し、形ある作品に残すことにより、創作の喜びを味わう。
- (2) 記譜や読譜をとおして、音楽の基礎的な知識・技能を修得する。
- (3) 自他の作品発表を通じて、級友と協力し合い、音楽による交流をはかる。

## 7 使用教科書・教材，教具，参考楽曲

教科書：「T u t t i 音楽Ⅱ改訂版」（教育出版社），「改訂新版 高校の音楽1」（音楽之友社）

教材：「音楽通論」（教育芸術社），「高校生のための音楽研究ノート」（同社），自作プリント

教具：キーボード（各グループ1台），ピアノ，ギター，打楽器等

参考楽曲：「赤とんぼ」（三木露風 作詞／山田耕筰 作曲），

「待ちぼうけ」「この道」「ペチカ」（北原白秋 作詞／山田耕筰 作曲），

「落葉松」（野上彰 作詞／小林秀雄 作曲），「初恋」（石川啄木 作詞／越谷達之助 作曲），

「火と水と」（能村研三 作詞／会田道孝 作曲），「小さな空」（武満徹 作詞・作曲）

"Autumn Leaves" (Yves Montand 演奏) (Bill Evans Trio 演奏)

「おお シャンゼリゼ」（安井かずみ 訳詞／M.ディガン 作曲／岩本達明 編曲）

## 8 指導計画（全15時）

第1時「作曲を始める前に」

- ①音価の復習とリズムアンサンブルづくり
- ②記譜のルールとコツ

第2時「言葉はすでに音楽をもっている」

- ①イントネーションを生かしたフレーズづくり
- ②ヴォイスアンサンブルの発表

第3時「非和声音を知る」

- ①経過音と刺繍音の理解と演習
- ②指定の歌詞，コード進行，拍子・リズムで旋律をつくる

第4時「コード進行をつくる」

- ①和音機能 TDS の理解と演習
- ②指定の俳句について，6小節の旋律をつくる

★修学旅行の出発前に，題材について予告と課題→修学旅行を満喫しよう。

第 5 時「関西修学旅行の思い出を歌う1」

- (1) 作詞

第 6 ～ 7 時「関西修学旅行の思い出を歌う2」

- (2) 歌詞の音読と分析
- (3) 設定

第 8 ～ 11 時「関西修学旅行の思い出を歌う3」【本時／第8～9時】

- (4) 作曲
- (5) 編曲
- (6) 楽譜作成～初稿と配付用（ヴォーカル譜）3部

第 12 ～ 13 時「関西修学旅行の思い出を歌う4」

- (7) グループ活動
- (8) 発表会

第 14 ～ 15 時「関西修学旅行の思い出を歌う5」

- (9) 推敲・清書提出

★学習内容にあわせて、歌唱および鑑賞を随時、実施する。以下は曲目とポイント。

<名曲に学ぶ1> 「赤とんぼ」「待ちぼうけ」一部形式の名曲。言葉の抑揚と旋律との関係。

<名曲に学ぶ2> 「この道」「初恋」言葉に合わせた自由な拍子。歌とピアノの関わり。

<名曲に学ぶ3> 「落葉松」歌詞のイメージを表す音楽のかたち。

<名曲に学ぶ4> "Autumn Leaves" シャンソン×ジャズ。声楽×器楽。コード進行×即興。

<名曲に学ぶ5> 「火と水と」俳句（五七五）による歌曲。

<名曲に学ぶ6> 「おお シャンゼリゼ」ハモリのヒント。

<名曲に学ぶ7> 「小さな空」現代作曲家がつくるくうた。

<名曲に学ぶ8> 「ペチカ」たった6小節の美しい世界。

## 9 題材の評価規準

「音楽への関心・意欲・態度」	「音楽表現の創意工夫」	「音楽表現の技能」
(ア) 旋律、副次的な旋律や和声、音素材（声、楽器）の特徴、反復、変化、対照などの構成に関心をもち、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	(ア) 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、言葉のもつ音楽性や和声の特徴を生かして旋律をつくったり、表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。	(ア) 音素材や言葉の特徴、リズム、和声を生かし、構成を工夫した音楽表現をするために必要な創作の技能（記譜の仕方、課題に沿った音の組み合わせ方）を身に付け、創造的に表している。
(イ) 言葉と音楽の融合に関心をもち、言葉のもつ音楽性（抑揚、長短、強弱、韻など）を生かして、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	(イ) グループの特長を生かし、構成を考え、表現したい作品をイメージして音楽表現を工夫し、どのように発表するかについて表現意図をもっている。	(イ) 発表をするのに必要な演奏の技能（歌唱、器楽、アンサンブル）を身につけている。
(ウ) 名曲や級友の作品により、他者の創作や演奏に関心をもち、表現の学習に主体的に取り組もうとしている。		

## 10 本時（8～9／15時）の指導計画

### (1) 目標

表現したい音楽をイメージして、言葉のもつ音楽性や和音の特徴を生かして歌の旋律をつくる。

### (2) 展開

	学習内容および学習活動	指導上の留意点および◆評価規準と方法
導入	・あいさつ ・本時の目標確認	・意識づけさせる。
10分	<名曲に学ぶ6> 「おおシャンゼリゼ」 ・主旋律と対旋律を歌いながら、旋律の重なりと響きを味わう。	・歌うことによって気分をリラックスさせ、思考を音楽のモードに切り替えさせる。 ・対旋律の効果に気づかせる。
	<関西修学旅行の思い出を歌う3> ・表現したい音楽をイメージして、言	・仕組みを理解して段階を踏めば、誰もが効率よく作業が進められることを説明する。

展 開 40 分	<p>葉や和音の特徴を生かして歌の旋律をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リズムと和声をもとに、音の進行（上行・下行、跳躍・順次）を考える。</li> <li>・和声音と非和声音を活用する。</li> <li>・歌いやすく、言葉が伝わりやすい旋律になるように工夫をする。</li> <li>・歌の旋律ができれば、編曲する。 （伴奏、対旋律等）</li> <li>・随時、添削指導を受けながら、作品をつくりあげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の発想を尊重して誉める。その上で、他の可能性を示し、よりよい方法を追求させる。</li> <li>・「答えは一つではない」多様性を示唆する。</li> <li>・感覚に頼ってしまう生徒には、理論的な裏付けを考えるように助言する。反対に、深く考えすぎてしまう生徒には、気楽に試してみることを勧める。</li> <li>・机上の音楽にならないように、歌ったり、楽器で弾いたりして、実際に音を出して聴くように促す。</li> </ul> <p>◆机間指導を通じて、次項を中心に評価する。 「音楽表現の技能」(ア)</p>
休憩（10分）		
45 分 ま と め 5 分	<p>(つづき)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初稿1部とヴォーカル譜（グループ配付用）を3部作成する。</li> <li>・後片づけ</li> <li>・次回の予告</li> <li>・あいさつ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の作品や質問から、共有したい知恵を随時、紹介する。</li> <li>・次回は、初稿とヴォーカル譜の完成を目指す。</li> </ul>

## 7 おわりに

初任研指導教諭・〇〇〇先生（作曲専攻）のプリントに衝撃を受けて以来、器楽の創作指導を〇〇高校、〇〇〇〇高校で実践してきた。〇〇高校で海外修学旅行に携わるうちに、教科担当としても、この豊かな体験を形にしたいと思うようになり、生徒の俳句との出会いがこの題材を生んだ。ソウル、台北から奈良、京都へと行先は変わったが、〇〇高校でも継続している。

「歌だからね」〇〇先生からの御助言にハッとした。理論に縛られていた自分に気づき、歌と器楽の違いや、歌という音楽について改めて考えた。それは新たな発想の源にもなっている。

前指導課指導主事の〇〇先生、現指導課指導主事の〇〇先生、教科指導員の〇〇高校音楽科〇〇先生の温かい御指導の下、研究員の〇〇先生、〇〇先生の熱心な研究ぶりに触発されながら、報告をまとめることができた。貴重な機会をいただいたこととあわせて、関係諸先生方の御指導、御支援に心より感謝し、御礼の言葉としたい。

### ◇参考文献

- 総合音楽講座（9）和声の原理－その総合的なしくみと展開－（ヤマハ音楽振興会・竹内剛）
- コード作曲法～藤巻メソッド～2012第8刷（yamaha music media corporation）
- 日本名歌110曲集（音楽之友社）
- ペンとノートで発想を広げる“お絵描き”ノート術マインドマップ(R)が本当に使いこなせる本  
遠竹智寿子/月刊アスキー編集部(著)ブザン・ワールドワイド・ジャパン、ブザン教育協会（監修）2008

生徒の作品

「KYONARA(京奈良)」

作詞・作曲 A.H.

♩ = 80

Handwritten musical score for 'KYONARA' in 4/4 time. The score consists of four staves of music with lyrics written below. The key signature is one sharp (F#) and the tempo is marked as quarter note = 80. The lyrics are: 二うようとしず、かな - かにがこまね、と 二二三をかんじた -、きうとばら。

「秋景色」

作詞・作曲 M.K.

Handwritten musical score for '秋景色' in 4/4 time. The score consists of four staves of music with lyrics written below. The key signature is one sharp (F#). The lyrics are: あそだらに - もれ、じいりぐく ことのり、ま かげにゆられ、て、あひの なみうつ。

「山の中の迷宮」

~ that is our 2012 at Tokyo  
作詞・作曲 C.K.

Handwritten musical score for '山の中の迷宮' in 4/4 time. The score consists of four staves of music with lyrics written below. The key signature is one sharp (F#). The lyrics are: やまの口がゆくあてもなく、ほえすすめ めがしうあつく、こころさびし ああとも、よ ああともよ。

「もじり」

作詞・作曲 N.W.

Handwritten musical score for 'もじり' in 4/4 time. The score consists of four staves of music with lyrics written below. The key signature is one sharp (F#). The lyrics are: じいりぐく ことのり、あそだらに - もれ、ま かげにゆられ、て、あひの なみうつ。

# コードネームを活用した創作と発表 「修学旅行の思い出を歌う」

